
2号 北海道がんセンターたより

平成16年5月発行

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター

〒003-0804 札幌市白石区菊水4条2丁目3-54 TEL 011-811-9111

☐ホームページ <http://www.sap-cc.org>

編集発行人: 荻田 征美



北海道がんセンター

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。



小児科紹介



小児科 医長 飯塚 進

こどものがん（悪性腫瘍）について聞いたことはあまりないと思います。これは確かにそれほど多いものではありません。しかし元気に生まれたこどもの死亡原因では、事故について多いのがこどものがんなのです。国立病院機構北海道がんセンター小児科では主にこの治療をしています。実はこどものがんは大人の癌とは起りかたも治療も違います。病名もよく聞くような胃がん、肺がん、乳がん等ではなく、白血病（大人で多い慢性骨髄性白血病と違い急性リンパ性白血病と急性骨髄性白血病がほとんどです）、腎芽腫、神経芽腫、横紋筋肉腫、悪性リンパ腫などです。治療も必ずしも手術で取るのではなく薬（抗がん剤ですがこどものがんには非常に効く薬もあります）や放射線治療も組み入れた、いうならば四方八方から攻める治療で完全に治すことを目標にしています。このためさまざまな診療科の先生と一緒に考えて治療をしています。それらの治療でこどものがんは以前と比べ治ることが多くなってきています。それでも充分とはいえません。その成績の向上のために（病気のこどもたちがもっと治るよう、またもっと副作用が少ないように）今日本中でそして世界中でこどものがんを治療している医師が集まってよりよい治療を、よりよい薬を、と研究もしています。私たちもさまざまなこどものがん治療についていろいろなグループでの共同研究をしてい

ます。そこで分かってきたことをもとにして、不運にもがんとなってしまったこども本人と御家族とともに相談し一番いいとみんなで思えた治療をしています。

残念ですがすべてのがんのこどもが簡単に治るわけではありません。はじめの治療が効かなかつたり再発したりすることもあります。それでも落ち込むことはありません。以前と比べ新しい治療の方法がいくつもあります。ちがう薬で、ちがう方法で治療しましょう。でも、こどもさんがあるいは家族の方がどうしても無理だと思ったら相談してください。（私たちも相談します）少し治療を休む、元気が出るようなことをする。そしてまた次のことを考えてもいいのです。みんなで長い目で、またその時々を考えて一番の治療をしていきたいと思っています。

誤解されるかもしれませんが付け加えますが、私たちはがんだけを治療しているわけではありません。貧血や喘息、原因のはっきりしない発熱そして風邪や発育の心配など何でもみています。心配なことがあったら御相談ください。

今年の4月から小児科は医師2名、レジデント1名です。潤沢な人員とはいえませんが御迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、小さくとも力のあるスタッフですのでよろしくお願いします。

Contents もくじ *****

小児科紹介	小児科医長 飯塚 進	1
「ほくろ」と「メラノーマ=黒色腫」について	皮膚科医長 加藤 直子	2
「がん」と「病理検査」	臨床検査科 病理主任 今井 直木	3
院内探検「理容室・美容室」の巻	広報委員 伊藤真奈美	4

「ほくろ」と 「メラノーマ＝黒色腫」について



皮膚科 医長 加藤 直子

最近、以前にも増して、手掌（てのひら）と足底（足の裏）の黒い斑点が心配という方が受診しています。「テレビで手足の「ほくろ」は「メラノーマ」というがんになると言っていたので心配で来ました」と言います。皮膚科医が診察すると多くの場合は良性の「ほくろ」です。

白色人種では日光（紫外線）の刺激により「メラノーマ」が発生することがわかっていますが、黄色人種である日本人の場合は、紫外線と関係して発生する「メラノーマ」は多くありません。代わりに手足や爪の下や周囲など、外からの刺激を受けやすい部の「メラノーマ」がクローズアップされて話題になっています。

「メラノーマ」は色素（メラニン）をつくる細胞である色素細胞（メラノサイト）由来のがんのため、その名前と呼ばれています。皮膚に最もできやすいがんですが、色素細胞は眼球や脳を包む膜（脳軟膜）にもあるので、そこからも「メラノーマ」ができます。発見が遅れ進行すると、全身に転移し生命の危険があります。

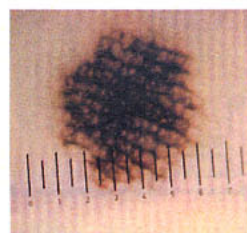
「ほくろ」もやはり色素細胞由来で2種類あります。ひとつは出生した時にすでに皮膚にみられるもので、先天性色素性母斑（せんてんせいしきそせいぼはん）といいます。多くの人にはありませんが、まれに直径が20cm以上ある大型のものがああり、そこからは「メラノーマ」が5～20%程度の頻度で、しかもまだ若い頃から出現します。ですから皮膚科では、人生の早い機会にその「ほくろ」を取り除く工夫を色々としています。もうひとつはほとんどの人が持っている後天性色素性母斑（こうてんせいしきそせいぼはん）です。これは出生時には無く、生後2～3年後くらいから徐々に出現するごく普通の「ほくろ」です。あまり大きくなり、通常9mmよりも小さく、圧倒的多数は6mm以下です。ここからの「メラノーマ」の発生はあまり多くないと思われています。つまり「メラノーマ」も「ほくろ」も同じ色素細胞由来なのでよく似ているけれども、違うものということです。

皮膚科外来では、手足や顔などの「ほくろ」のような黒い斑点を心配して受診した方達に、「ダーモスコピー」検査をしています。斑点の上に少量の超音波用ゼリーを付けて、約10倍の拡大レンズの付いている「ダーモスコープ」という器具を皮膚に密着

させて観察します。検査は全く痛くありません。「ダーモスコープ」では散乱光のない状態で皮膚を観察しますので、表面の凹凸と色素の分布の関係が良く分かります。「ダーモスコープ」写真を2枚載せます。写真①は皮溝平行型、写真②は格子様型といい、両方とも「ほくろ」に特徴的なものです。これらがみられた場合は手術をせずに経過をみることができます。



写真①



写真②

白色人種の多いアメリカでの皮膚の「メラノーマ」の発生率は日本のほぼ10倍です。そこでアメリカでは一般の方達に、「メラノーマ」の自己チェックのめやすとして「ABCDE」を教えています。ちょっと難しいかもしれませんがご紹介します。Aは非対称性（asymmetry）、Bは辺縁（border）が不規則、Cは色（color）がぶちになっている、Dは直径（diameter）が6mm以上、Eは最近大きくなった（enlarge）というものです。これらに当てはまるような黒褐色の「ほくろ」のようなものが出ていれば、皮膚科専門医を受診するよう勧めています。イギリスではもっと簡単に、「3つの変化」に注意するよう啓蒙しています。それらは「大きさの変化」「形の変化」「色の変化」です。「ほくろ」だと思っていたものにそれらの変化があれば、皮膚科での検査を勧めています。みなさんも黒い斑点で悩んだ時、「ABCDE」と「3つの変化」を参考になさってみて、当たっているのが心配と思われた場合は皮膚科を受診して下さい。

「がん」と「病理検査」



臨床検査科 病理主任 今井 直木

「がん」「癌」は、昔からある名前です。現在、悪性腫瘍（しゅよう）全体をあらわす言葉として広く用いられています。腫瘍とは、不規則にすすんで増えていく自分の細胞（さいぼう）から出来た物で、新生物（しんせいぶつ）とも言います。

この腫瘍（新生物）が、良い物か悪い物かを見極めて、悪い物であった場合、悪性腫瘍（悪性新生物）つまり「がん」という診断になります。なぜ出来るかは、いろいろ説ありますが、自分の細胞から出来るものですから誰にでも起きうる事だと言えます。

なんらかの形で腫瘍やがんが疑われた場合、様々な方法や検査で、「がん」である事や、または「がん」ではないであることを判断します。その方法の一つに「病理検査」があります。

「病理」は、広い意味では字のごとく「病（やまい）の理（ことわり）」で病気の成り立ち・理由全体を言いますが、狭い意味での「病理」は、一般的には「病理組織学（びょうりそしきがく）」を指します。

組織とは、生物の最小単位である細胞（さいぼう）の連なりを言います。この組織を検査するのが、「病理組織学検査」いわゆる「病理検査」です。

組織を体からなんらかの方法（たとえば、胃カメラなど内視鏡で採ってきたり針などで刺したり、もちろん手術もその方法の一つです）で採ってきます。

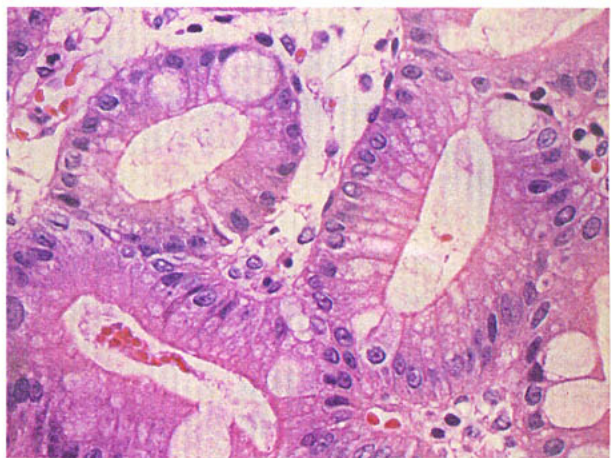
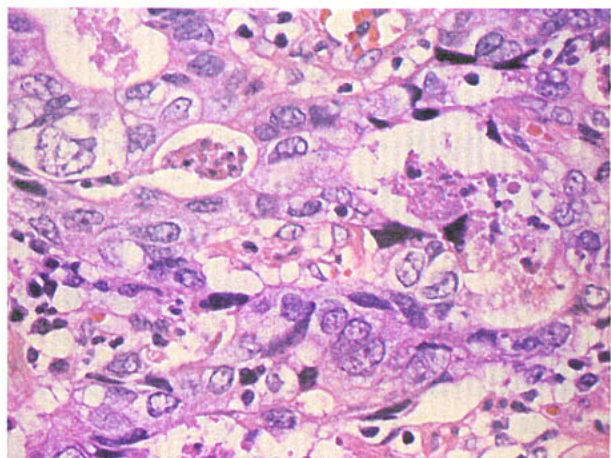
生きている組織は、人の体から離れた時から、腐り始めるので、そのままの姿に保存します。また非常に小さい物なので、顕微鏡で見るために、工夫が必要となってきます。

細胞が重なると見えづらいので、薄くなるようにしたり、またははっきりわかるように色で染めたりします。その後、病理医という資格を持った医師が、顕微鏡で観察し、元あった状態など考え、総合的に診断します。

この診断を元に、主治医が今後の治療方針を決めることになります。

「胃がん」と「がんでない胃」のそれぞれの組織の写真です。病理検査で診断した「胃がん」は、どちらだと思われますか？

上が「胃がん」です。下は「がんでない胃」です。



当院ホームページももう少し詳しく説明しておりますので、ぜひ覗いてみてください。

北海道がんセンター → 臨床検査科 → 病理検査室 でご覧下さい。



「理容室・美容室」の巻



広報委員 伊藤 真奈美

みなさんは「病院」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？

中央採血室や外来の待合室、会計のカウンター、病棟の廊下・・・確かに病院の風景ですね。でも病院の中には、直接診療には関わらないけれども日常生活に必要な施設が色々あります。

今回はそれらの施設の中で、理容室・美容室についてとりあげてみたいと思います。正面玄関から右手に進み、薬局の前でまた右に進むと理容室・美容室があります。

理容室 お話を伺ったのは、横障子（よこしょうじ）世志巳さんです。

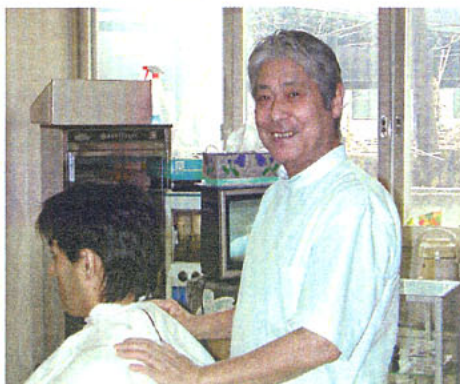
横障子さんは昭和34年4月からこちらで営業されています。現在は一人でお店を切り盛りされています。場所柄、お客様＝患者様であることが多いので、とにかく疲れさせないよう気をつけていらっしゃるの事でした。

「僕も若い頃に、5年間闘病生活を経験した事があるんだ。患者さんの気持ちになって物事を考えることの大切さは他の床屋さんよりもわかんと思うよ。」地域のお客様を対象にした床屋さんよりも院内の床屋さんの方がたくさんのお客様との出会いがありやりの事があるのだそうです。

「健康でもそうじゃなくても、どんなお客様に対しても、誠意をもって仕事をするのが私の信念です。」と何度も繰り返しておっしゃっていました。

詩吟が趣味で、人と関わるこの仕事が好きとおっしゃる横障子さん、とても明るく「頼まれればその日のうちにさっぱりさせてさし上げますよ!」と仰ってくださいました。

料 金・総合調髪 ￥2600
カットのみのみ ￥1700
営業時間・午前9時～午後5時
電 話・(内線)562番



美容室 お話を伺ったのは東久美子さんです。

いつから営業されているのですか？と尋ねたところ「病院の開業直後かららしい」とのこと。どうやら40年くらいは営業されているようです。（理容室も同様ですが、すごい歴史ですね）

現在は二人体制で営業されています。やはり院内という事で、お客様相手の会話では、言葉遣いや話題などに気をつけているそうです。仕事上、大変だと感じたのは、病棟で行う「出張カット」。寝たままの患者さんの髪を切るのがとても難しく、技術を要するのだそうです。もちろん患者さんの体に負担がかかりますし、美容師さんの体勢もなかなか大変なものがあるのだそうです。そんな毎日の仕事を通して感じた事をこう話して下さいました。

「ここで仕事をしていると命の大切さや、健康であるという事のありがたさを実感します。私たちがの方がお客様に元気・勇気をもったりすることも多いですよ。」

・・・そんなお話を聞きながら、前髪をカットしていただいた私でありました。

料 金・カットのみ ￥2625
パーマ・カラーも受け付けています。
営業時間・午前9時～午後5時
電 話・(内線)561番

